
Monster Hunter ~ ある晴れた空、旅立ちの日 ~

柿木いいちこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Monster Hunter ある晴れた空、旅立ちの日

【Nコード】

N1418C

【作者名】

柿木いちこ

【あらすじ】

世を統べるのは飛竜か、果たして人間か。人はその答えを未だに持たず、また、飛竜もそれを知らない。互いが互いの正義によって存在する理不尽とも言える世界に、俺ことキース・ヴァンドレ・ハーツは今日も不変の営みを続けている。しかし不変であったハズの日常はある人物との出会いにより大きく狂わされ

……

序章 第一話 邂逅、それは平和との離別の言葉に他ならず

空は真つ青と呼ぶに相応しい程蒼く、心の底から気分の良くなるような晴天。小高い丘と生い茂る緑から構成されたエリア『森と丘』は、今日も変わりなく在った。

俺はそんな下らない事を嬉しく思いながら、草食型モンスター『ケルビ』の小さな背中を眺めている。が、それは別にヤツの愛くるしさに胸をヤラレた訳でなく、ただボンヤリと眺めている訳でもなかった。

今回俺が受けた依頼内容は、『ケルビの皮』を15枚分集めてくる事。つまり、俺はこの見通しの良いエリア3にいる『ケルビ』の中で、一番上質な皮を誇る『ケルビ』を探していた訳だ。

「……よし」

まず、崖側で跳ね回っている『ケルビ』に狙いをつける。背中に装着した特製のホルダーを音もなく外し、大剣の柄を握り締め、風のように疾駆。

俺の身に着けている貧相な『ランポスシリーズ』は強靱な防刃、防火がないかわりに安価で、何より軽い。値段にはピッタリなのだろうが、こういう走る事を前提とした依頼には実に便利だ。

一陣の風の如く接近する俺に『ケルビ』が気付き、甲高い鳴き声を上げながら再び跳ね回ろうとする。しかしそれを許すほど俺は寛

大ではない。即座に大剣《ボーンブレイド改》を引き抜き、裂帛の気合いを込め振り抜く。

鈍色の瀑布となって肉薄する《ボーンブレイド改》。飛竜の骨を研磨加工し精製された剣の歯は、飛び上がる為に一瞬の間を見せたケルビの首すじに深く食い込み、肉を咀嚼し、骨をも喰いちぎる。

逃げる間もなく首を切断されたケルビはなすすべもなく草の上に倒れ伏し、動かなくなる。

「まずは一匹目、有り難く戴くよ」

俺は手で簡単な印を切り、命を貰った事への謝罪と感謝を表明し、それから解体を始める。背中から取り出した大振りのナイフを柔らかな肉質の腹に突き立て、一気に裂く。

途中の解体シーンは割愛。ナイフを背中にしまい、背中の大剣の柄を再度握り締める。

一枚目はなかなか上質だったから、次は

グウオオオオアアアアア！

突如耳に侵入してきた唸り声と爆裂音を聞き、とつさに横に転がり、状況を把握しようとする。

俺が見たのは異様な状況といっても過言ではないであろう 惨

劇だった。

エリア3を闊歩していた数匹の《ケルビ》は、いずれもが燐の炎に身を焦がし、なおも燃え続けながら横たわっている。勿論、周辺の木もだ。

「チツ……！！」

凄まじい戦慄と恐怖が俺の中で吹き荒れる。気配すら感じとれなかった相手に油断は出来ない。

狂気をはらんだ赤い瞳で俺の瞳を射抜き、どす黒い紫色に変色した体躯を揺らしながら近寄ってくる《モノ》……俺は、こんな飛竜を今まで見た事がなかった。

生存本能から瞬間的に大剣を構え、攻めも守りも切り替えられる戦法を選択。だがヤツはそれを全く気にせずに、間合い外から巨大な尻尾を鞭のように放ってきた。

素早さのみで単調な、大気を裂いて襲ってくるそれを大剣でいなし　いなそうとしたが、あまりの破壊力に大剣ごと体が吹き飛ばされる。

俺は自身に浮遊感を感じる間すら許さず、大剣を振ってバランスを強制的に取り戻し、地面に着地。ヤツとの距離はかなり離れてしまった。

「く……」

信じられない力である。サイズからすれば小型、《イャンクック》の部類に入る飛竜とは思えないほどだ。

俺は吹き飛ばされた衝撃で凹んだ《ランポスシリーズ》胸部装甲を見ながら武者震いをし、炎を吐こうと火炎袋を膨らませているヤツに対して自分でも驚異的なほどの疾駆を始める。

大地を踏みしめ、辺りの焦げ臭い空気を胸一杯に吸い込みながら《ボーンブレイド改》の刃を高速展開、刃を引きずりなお走る。ヤツは炎の放出を開始、紅蓮の爆炎が俺目掛けて発射された。

「……ッうるおおおおおああああ!!」

大地を盛大に削りつつ、巨大な大剣が俺の目の前の空間を一気に箭断。紅の業火は散発的に霧散し、俺は頬を多少火傷した程度の負傷で立っていた。

なおも止まらない大剣の勢いを逆に利用、体勢を立て直し、最短距離を一気に駆ける。本来ならば誉められたモノでない接近方法だが、ヤツが第二射を溜めている今の場合は有効だろう。

ヤツがようやく火炎袋から特殊な気管を伝って煉獄の炎を撒き散らそうとした時、俺は既にヤツの足元にいた。すかさず大剣を振りかざし、雷と化した剣撃を見舞う。

ヤツの紫がかった太い脚のなかほまでに、研磨加工された大剣の刃がかじりつく。しかし異常に発達した皮膚はことさら頑牢で、刃の勢いが若干削がれてしまった。

「……堅い！反則だ！」

自分でも情けなくなるような弱音を吐きつつ、大剣を引き抜こう

とする ……が、大剣は接着でもされたようにビクともしなかった。

焦って引き抜こうとした瞬間、俺の頭上で膨大な熱量が渦を巻き、熱い風が頬を激しく撫で回す。死の予感を明確に感じとった俺は爆発的に後退、熱量の勢力域から全速力で逃げる。

刹那、先程まで俺がいた場所を盛大な熱量を伴った豪火球が吹き飛ばし、深い穴を創造した。俺は焦げ肉の運命から逃れられた事に少し安堵しながら大剣を構え、構えようとして、ヤツの脚に刺さっているモノを直視、暗澹とした気分を空に放り投げながら逃走。

当然ヤツは怒りを露わにし、俺を追走してくる。その走り方を見て、俺は度肝を抜かれた。

(……………“軽い”！)

ヤツの脚の上げ方、地面の蹴り方から何から何までが……………一挙手一投足、恨めしいくらい軽快なのだ。恐らく、先程に俺がコイツの気配を感じられなかったのもそのせいだろう。

……………そうだと思いたい！

「うおおおおー!!」

ヤツが走りながらも放ってきた火炎弾が俺の背中を追走、仕方なくエリアとエリアを結ぶ岩壁に挟まれた狭い路地に逃げ込む。正確無比な一撃は虚をつかれた為に狙いが逸れ、堅い岩壁を易々と抉っていく。

「へへっ、ここまで来たらキミには手出しが出来ま…せん……よ…
…?」

俺は言葉が紡がれるにつれて呂律が回らなくなってくるのと、顔の全筋肉がひきつれてくるのと同時に感じていた。

なんとヤツは、侵入不可能なハズである岩盤に包まれた狭い路地という難攻不落の砦、エリアの狭間を、いとも容易くブチ破って下さったのだ。

コイツが人間ならば人類の限界という制約を乗り越え、人類史に残る偉業を達しただろうな、などという無駄な思考を切り捨て、何度か目の逃走を図る。

ヤツはなおも岩盤の破壊と逃亡者の追跡という離れ業をやつてのけ、やはりというか、諦めた様子はなかった。

「……チッ！」

俺は全速力で柔らかな地面を貫き存在する巨大な木の根を飛び越え、同時に腰のハード・ケースに手を差し込み、中に入っている“お手製武具”をひっ掴む。

空中浮遊している最中に“ソレ” 鉾石で研磨加工した特製投げナイフ を七本程投擲。それらは全てが別々の樹木に深々と突き刺さるか木の幹に幾重にも巻き付くかをする。

投擲された投げナイフの柄尻と、俺の手元にある片手剣サイズのナイフの柄尻は、釣りに使用するモノと偽って狩り場に持ち込んで

いる“プラスチック強化構造式鋼系”で繋いであり、俺の主力武器だ。外見は通常の鋼系と変わらないが、耐久性、耐火性、その他諸々が既に別次元である。

龍が波動を放射する際に顕現化するとされる幾何学模様をあしらったかのように改造鋼系が展開、無造作に突撃してきたヤツの翼を絡め取る。

俺はすかさず弄んでいた最後の投げナイフをヤツの背後にあった大木に投擲、複雑に絡め合った鋼系はヤツの翼と牙に深く食い込み、動きを完全に制限する。

「詰みだな……」

俺はなおも足掻くヤツを見ながら、満足げに呟く。その時、ヤツの姿に妙な既視感を覚えた。

切り傷と火傷に覆われた顔に付いている巨大な耳、鳥の嘴のような、しかしそれでいて鋭く尖った牙が見え隠れする嘴。

よく見れば、尻尾以外はまんま大怪鳥だった。

「……でも、なんでこんなに違う」

俺が疑問を紡ぐのを遮って、目前の大怪鳥ならぬ大怪鳥が爆発的な叫び声を上げる。鼓膜が激しく振動し、俺は反射的に耳を抑える。

「くっ……」

苦鳴を漏らしながらもヤツを凝視して、そして絶句する。俺の視線の先には、まるで絶対的な力行使されたように引きちぎれる、ブルファンゴの突進すら歯牙にかけないハズの鋼系の姿があった。

「バカな！」

“プラスチック強化構造式鋼系”の常軌を逸脱する耐久性を知っているだけに、俺の驚愕は激しい。だがさしものヤツも、そんな鋼系を引きちぎって無傷とは行かなかったようだ。

ヤツの翼はあらゆる場所から流血しており、また、嘴も下部が若干こそぎとられている。

俺が一体どうしたものと煩悶していると、ヤツは素早く翼を広げ、爛々と赫怒の炎を瞳にたぎらせながら、暴虐の嵐を撒き散らし始める。

俺は余りの風圧に吹き飛ばされないようにするのに必死で、ヤツが上空に飛び立つのを、ただ黙って見ているだけしか出来なかった。

「……………」

啞然。俺は啞然とするしかなかった。

あれほど自身の状況を冷静に分析し、素直に退却する知性を持った飛竜がいたのか。しかも、半端ではない。

余りの呆気ない戦闘の終わりに呆然とする俺の背中に、突然ぶつきらばうな声が投げかけられた。

ギルドによって、一人でしか入る事が出来ないように構成されているエリアで、だ。

「なんだ、もう逃げちまったのか。相も変わらず、殺し合いの機微がよくわかってる野郎だぜ」

「……さっきから“赤光照準器”がうるちよろしてると思ったたら、

誰ですかアンタ」

唖然としつつも突如聞こえる声には全く動じていない体を装い、俺は胡乱げな視線を送る。俺の視線が注がれている大木の影には、見たこともない鎧に身を包んだ男が立っていた。

男の右手には、これまた未知のボウガン。といっても、俺が武具や防具に明るい方ではないただだが。

「おいおい、そう睨むなって兄ちゃん！俺はアイツを追ってあてどない旅を続けてるモンさ！」

「流れのハンターですか？」

「ああ、そうだ！俺の名前は」

「あ」

「？どうした？」

「……大剣、俺の全財産で買った大剣が……」

「ああ、あの見事なオブジェな。良いじゃん別に、お前初心者じゃないんだろ？ 買えよ、買え買え、問答無用で買っちゃえ」

「……………」

俺は胡乱過ぎるこの男も理解出来ない謎の飛竜も、俺のしている夢の出演者ではないかと、一瞬、本気で疑った。

空は真っ青と呼ぶに相応しい程蒼く、心の底から気分の良くなるような晴天。小高い丘と生い茂る緑から構成されたエリア
『森と丘』は、今日も変わりなく在った。

そう思っていたのは、どうやら俺だけだったらしい。

まさにこれは理不尽な邂逅で、そして、これから始まる最高に理不尽な旅の 波乱の幕開けだった。

序章 第一話 邂逅、それは平和との離別の言葉に他ならず（後書き）

初めまして、柿木いいちこと申します。

まだまだ至らない若輩者ですが、少しでも進歩、執筆技術の向上を願っておりますので、どうか宜しければ作品に関するご感想、ご批評をお聞かせ下さい。
では。

第二話 日常は喧騒によって非日常に変わり

旅商人の広げている質素な布地の上には様々な種類の弾薬、衣料品、薬品が置かれ、実に鮮やかな色彩を放っている。そんな即席的な店は、我が家の前の通りだけでも数軒見受けられた。

通りを散策するカップルや、まだまだ無名のハンターが未来の自分に思いを馳せながら、思い思いに買い物をしている。

俺は家の中からそんな微笑ましい光景を見つつ、暑苦しい鎧を脱ぐ。ベツコリと凹んでいるため素晴らしく脱ぎにくい、そこは慣れたモノである。

引き締められていた革紐を緩め、後は力技で強制的に鎧を脱落。

「ふう」

軽く肩をほぐしながら傍らに置かれていた朽ちかけた材木で造ったような椅子を引き寄せ、腰掛ける。直後にギシギシと軋んだ音を立てるが、完全に無視。

二日かけて村に舞い戻り、ようやく一息つけた気分だ。先日のかエストは理解不能な事が多すぎた為に疲労の色が流石に濃い。

しかも俺の所有していた全財産で購入した大剣が、謎の飛竜の謎のオブジェとなってしまったとあればなおさらだ。自慢ではないが、俺はひどく貧乏である。このガランとした、生活臭のない部屋を見てもわかるように。

要するにほとんどが引越してきた姿のまま、増えているのはボロい椅子だけなのだ。

「……………はあ」

俺は軽く瞼を閉じ、現実逃避も兼ねて少し情眠を貪ってやろうかと思った瞬間、扉が騒がしくノックされた。嵐のような連打に眉をひそめながらも口を開く。

「は」

耳をつんざくような破壊音が俺の不機嫌な言葉を遮り、更に破損、爆裂した扉がささやかな断末魔を上げる。

あまりの暴挙に俺はしばし声が出なかったが、もうもうと立ち上る煙をうるさそうに掻き分けながら接近してくる男を見て、流石に声が洩れた。

「……………扉があつたらノック、これは正解です。満点をあげます。」

しかし次がいただけない……………何故破壊行為に走るんですか？そういうロマンでも存在するんですか？」

俺の平然とした言葉に業を煮やしたのか、侵入者は大声を張り上げながら大股で歩み寄ってきた。

「テメエ……………また”俺の作った武器壊しやあがつたなっ？！なんか恨みでもあんのか、折角試作品を半額以下で譲ってやったつてえのに！」

侵入者　もとい、何ヶ月か前に鍛冶屋のオヤジに弟子入りした駆け出し鍛冶屋が、俺の肩を目一杯の力で掴んで力一杯振りまくりながら叫んだ。そりやもう泣きそうな顔で。

まあそれには無理もないのだろう。なにせこれまでで俺が壊した彼の作品は通算で二桁にものぼるのだから。

というか、もう気付いて欲しい。キミが毎度毎度、今回の大剣は絶対壊れないなんて言うから、俺の意地悪が発動するのだという事を。

しかし今回は事情が違う　しかも細かく言えば壊してはいない。

それを細かく伝えてやろうとした時、背後の《アイルーキッチン》から素っ頓狂な声と騒がしい足音が聞こえてきた。

「おう、なんだ一体？　ギルドナイツの狗共の力チコミか？」

巨大なモスの前肢をくわえつつ、男が愉快そうに唇を歪めながら言った。器用な人だ。こんな時でなければ教えを請いたい程面白い食べ方である。

……勝手に入って勝手に食事をしていなければ、という項目も追加しよう。

「違いますよ、単なるエセ鍛冶屋の暴挙です。

……というか、ギルドナイツの事を口に出さないで下さい。あんな戦闘狂の殺し屋に狙われたくないですし。そして更に勝手に飯食わないで」

「誰がエセ鍛冶屋だデメエ！」

突如再開された言い争いを無視し、如何にもという感じで鷹揚にうなずく男を見ながら俺は溜め息をひとつ。

ギルドナイツとは、ハンターを斡旋するギルドの意向にそぐわない、または決まり事に背いた、ハンターの暗黙の了解を破った者に対して派遣される有名すぎる殺し屋だ。

しかもギルドナイツは名目上はギルド公認となっているものの、実質は予算が取れずやむなく空中分解した……つまりは“存在しない”事になっている。

さて、そこで問題。“存在しない”組織を“存在する”ものとして認識し、更にその事実を知らない誰かに、存在しないハズの存在を教えてしまったとしたら？

答えは、翌朝の謎の変死体が否応なく教えてくれるだろう。

そんな訳で、そんなヤツらに目を付けられるのは断固拒否だ。だから俺は絶対に関わらないように今までやってきた。

噂では、口に出しただけでは《キリングリスト（暗殺予定者調査書）》に載るといっし。

だがしかし、快活に笑う男は、ギルドナイツの危険性をわかっているようには全く思えない。これっぽっちも。

俺は内心、今日だけで何度目かの溜め息を深く吐いていた。

すると、男が俺の意向を読んだように口を開いた。

「ふふん……そんなに俺の事が気になるのか？ 仕方ない、話してやろう！ さあ、なんでも聞いてみな！」

わかっていない。俺の意向なんてわかつちやいなかった。
若干悲しくなりながらも、渋々質問。

「……えっと、じゃあまずはアナタの名前を」

社交辞令だった。男は本当に嬉しそうな、素晴らしく無邪気な笑顔を向けてきた。

「俺の名前はクロナ ああ、やっぱり長いからクロナでいい。クロナと呼んでくれ」

「はあ……」

「次はお前さんだぜ、兄ちゃん！兄ちゃんの名前は？……いや、そんなのよか自己紹介をしてみらおうか！俺も後で自己紹介してやるからよ」

カラカラと笑うクロナの顔を直視、仕方なしに自己紹介を始める。

俺の名前はキース・ヴァンドレ・ハーツ。もう何年も前に没落した騎士家系、ヴァン家の一人息子だ。

そんな俺が何故ハンターなどという危険極まりない職業をやっているのかというと、これは案外簡単な話。

祖父から叩き込まれた騎士道と、そして大剣を扱うための技術を生かせる場所が他に思い付かなかったからだ。

まさか旅商人で大剣を振り回すハズもないし、何より“弱き民を救う”という騎士道の不文律を守る事が出来ない。

そんな訳でハンターをやっているのだ　　というような事を説明し、俺の自己紹介終了。

俺の身の上話　　といつても簡単な自己紹介だったが　　を聞いてクロナは大仰にうなずきながら、約束通り自身の自己紹介を始めた。

「名前はさっき言ったからいいな。実は俺は伝説のボウガンを探すために旅をしているんだが　　」

待った。

「ん、どうしたキーセス」

「勝手に名前を変えないで下さいよ……いや、そうじゃなくて。クロナ、アナタはあの“飛竜”を追って旅をしてるんじゃないんですか？」

「あ、俺そんな事言ったか？　よく覚えとらんな！」

誤魔化すように大笑いを始めるクロナを見て結論、コイツ信用ならない。

「……もついいです、アナタの自己紹介は八割程がフィクションで構成されていそうだし。それより」

一旦言葉を切り、頭の中にあの飛竜の姿を思い描く。毒々しい紫の翼や嘴、全身の甲殻に刻まれた弾痕や斬撃の痕。それらを鮮明に思い出しながら、言葉を紡ぐ。

「あの飛竜はなんなんですか」

「……んん……“街”の胸糞わりい科学者共は、『ありとあらゆる見解からの科学的調査によって、アレが《イアンクック》の派生系 敵しい生存競争を生き抜き自然淘汰を覆した大怪鳥だという事を結論付けた』 とか言ってたな」

「《イアンクック》の進化系、という訳か。なんとも言い難い話ですが……ふむ、ヤツの固有名称は？」

「科学者は便宜上と呼んでいたぜ」
イアンガルガ

苦虫を噛み潰したような顔をしながらクロナが吐き捨てる。その様子から何か別の感情が読み取れそうな気がしたが放置。

しかし『ありとあらゆる見解から』と謳っているくせに科学的調査とは、なかなか妙なモノだ。科学者はやはり科学者といった所だろうか。

まあとりあえず《イアンガルガ》の名前と姿を頭にインプット

し、次は問答無用で逃げるようにして

刹那、爆裂したような轟音が部屋に響き渡り、俺のすぐそばに存在した壁が粉碎される。俺は嫌な予感を隠しながら横目で煙の中を見ていたが、

「……………嫌な予感は当たった。何故アナ達“師弟”は扉という人類の暗黙の了解を忘却するんだ。扉に恨みでもあるのか？」

俺は凄まじく辛辣な言葉を、巨大なボウガン《クックレイジ》を腰だめに構えるココット族の老人 鍛冶屋のオヤジだが に投げかける。老人は俺の言葉など歯牙にかけず、不敵な笑みを浮かべつつ傲然と言い放った。

「……………キース、お前に村長直々の特上依頼が来ている。可及的速やかに現場に向かうように」

「……………え？ い、いやでも、俺は大剣が……………」

「大剣ならワシが先日造り上げた試作品を貸してやる、言うておくが壊すな」

言い返す暇すら与えずに俺の心の避難経路を潰してくれた老人は、ついてこいとはかりに背を向ける。そして、呟くように言った。

「……今回の遊戯場所は“エリア”でもなんでもない……街道沿いだ」

第二話 日常は喧騒によって非日常に変わり (後書き)

こんばんは、柿木いちごでございます。

この作品について、宜しければ感想、ご評価をお寄せ下さい。
では。

第三話 疾風は猛牛の如く大地を駆け抜け

橙色に染まった空。それによって生じた薄い影は、どこか寂寥感を感じさせる。が、寂寥感を感じさせる風景は一瞬で後方に流れていく。

茜空の放つ淡い光が広大で見通しの良い街道沿いを照らし出す。そして俺の乗る黒猛牛超特急車にも、平等に光を与えていた。

光によって照らし出された黒い車体は歪に歪み破損している箇所が多く見られる。まあそれはブルファングの『直線以外はまるでダメ』という欠点のせいだろう。

そんな事を思いつつ、振動の激しい車内で四苦八苦しながら、俺は鍛冶屋のオヤジに貸し出された武器を最終調整していた。

貸し出された武器は突撃槍ランス、《工房試作品ガンランス》である。あのオヤジ大剣を貸してくれると期待していたら、

『ワシのロマンは突撃槍にしかない。イヤなら木の棒でも振ってブチ殺してこい。それに大剣も突撃槍も竜殺しの武器という点では何も変わらん』

などという素敵な暴言を吐いてくれやがった。確かに彼が突撃槍に限りない情熱を注いでいるのはよくわかる。

わかるが、ぶっちゃけた話、空気を読めよと言いたい。そもそも大剣を貸してやるとか言って突撃槍はないだろう。

確かに“西方流屠竜槍術”と言った対飛竜突撃槍戦術を会得しているが、俺は突撃槍はあまり好きじゃない。肌に合わないといった感じた。

「クロナ、どうです？！何か見えましたか？！」

凄まじい速度で運行している超特急車の凄まじい轟音に負けないくらい、思い切り声を張り上げる。

声を掛けられた事に気付いたクロナが、天井を無断でブチ抜き上半身のみを出している姿から律儀に声を投げ返してきた。

「後方前方右方左方、異常無しだぜ、キース！」

「そうですか、なら引き続きお願いします！」

「あいよ！」

その瞬間、車体が大きく傾き、車輪が絶望的な悲鳴を上げる。見ると、進路先は直線から曲線的な道に変わろうとしていた。

俺はすかさず《工房試作品ガンランス》を置き、釣り竿を手にする。釣り竿の先に釣り糸、そして釣り糸の先に巨大な肉の塊が付いている事を確認し、二頭のブルファンゴの鼻先に。

ブルファンゴは涎を撒き散らしながら速度上昇、土煙を三倍程増加しもはや四本の脚を視認する事が出来なくなった。

俺は肉を突然水平移動させる。それにつられてブルファンゴも右を向く。

車体が健気にもブルファンゴの動きをトレースし、突如迫り来る曲がり道に車輪を突き立てるようにして見事な横滑りを敢行。

車輪は軋み、土煙は速度に比例して増大し、当然車内は爆発的な振動が猛威を振るっていた。

しかしクロナは顔色ひとつ変えずに二丁のボウガン、《メテオバスター》の一際巨大な可変倍率スコープを調整し、《鬼ヶ島》の長大なロングバレルを縦横無尽に巡らせている。

俺はこの時初めてクロナを凄いと思った。困難極まる依頼を二つ返事で了承した事も含めて。

だからかもしれない。穴から少しだけ覗く顔付きに興味を持ってしまったのは。

紫がかった漆黒の瞳。精悍な男の顔付き。瞳と同じ色をした漆黒の長髪。黒い鎧に包まれた筋骨隆々とした肉体。

そのいずれもが、男の理想像だと思える程完璧だった。少し悲しくなりながらも、俺は釣り糸を垂らすのに集中する。

曲がり道にさしかかる度に車体は横っ腹を向け、凄まじい車体と車輪の鳴き声の二重奏をBGMに、曲がり道を通していく。

そんな事を何度か繰り返した時　俺達はずいぶん今回の標的を発見した。

大きく開いた口腔から紫煙を吐き、傷だらけの翼を広げ優雅に滑

空、俺達を嘲笑うかのように飛翔を続ける　　どす黒い紫の恐怖を纏った死神。

イヤンガルルガ。

「　見つけた！！」

俺は抑えようもない恐怖を振り払うように叫び、村長の依頼を頭の中で再確認する。

何時もふざけたような態度をしている村長が硬質な光を瞳に灯しつつ、俺達に言った言葉を。

『　……楽にしてやれ』

それだけだった。彼はそれ以上は何も言わず、ただただ俺の目を真っ向から見つめていた。彼の瞳に宿っていたのは、これ以上ないくらいの憐憫と、深い悲しみだった。

恐らくは、彼なりの優しさなのだろう。復讐に燃える哀れな飛竜の生涯を、苦しみもなく終わらせてやってくれという。

「キース、準備はいいな！？」

そんな村長の、復讐の愚かさ、無意味さを誰よりも理解している彼の願いを……

果たして誰が、理解出来ない、叶えたくないと言っただろうか？

「……ええ！いつでも！」

釣り竿を放り投げ、前方を飛翔する不吉の象徴を見据える。全てを終わらせる為の武器を掴み、速度を

「……！待て、キース！ 野郎の掴んでるモンを見る！！」

「え……？！」

沈みつつある夕日に溶け込むようにして存在するイヤンガルルガは視認が困難だった。

脚に一体何があるというのか。

怪訝に思いながらも備え付けの望遠スコープを覗き込み

「なッ……！！」

紫の死神。死神の翼が羽ばたくたびに、強靱な脚が揺れる。

そしてその脚が掴んでいるのは 何故か軽装鎧を着込んでいる、小さな女の子だった。

目立った外傷はないように思えるが、なにしろこちらは振動する車体から、更にはかなりの距離から見ている。実際はどうなのか。

「くそ!!」

素早く腕を動かしブルファンゴの尻に鞭をくれ、更なる加速を要求する。俺の焦りを投影されたようにブルファンゴは天高く吠えながら、限界近くの速度まで加速する。

「やらせるかよ……!!」

そつだ。そんな事、許せる訳がない!

俺は突撃槍の重厚な柄を握り、引き金に指をかけ、火薬と殺意の塊、鉛玉が入っているのを確認。

どことなく余裕のない表情をしているクロナが視界の端に映ったが、今はそんな事を気にしている場合ではない。

「待つてろ……俺が、俺達が、絶対に助けてやる!!」

絶対の決意を秘めた叫びは、荒れ狂う暴風にもかき消される事なく、そして、長い戦いの火蓋が切って落とされた。

* * * * *

頭の中で、過去の情景がフラッシュバックする。

暗闇。果てしない暗闇の中。黒く塗りつぶされた箱庭の中。

一区画が。半分が。全てが。

深紅に染まっていた。真紅に染まっていた。辛苦の赤だった。

そんな中で、茫然と立ち尽くす男は、何よりも血にまみれていた。

男の周辺には、血の池に倒れ込む人間達。親しかった仲間達。愛した親友達。

その中でも一際目に痛く。心を砕いたのは。全てを決定的なまでにしたのは。

空虚な瞳を空に投げかけて、既に息絶えていた……少女の姿と

爛々と輝く紅い瞳をこちらに向けて立っている、『死神』の姿だった。

男は過去には持ち得なかった双つの力を握り締め、己が胸の内ですれ狂う憎悪を吐き出した。

不意に、双つの力が吼えた。どこまでも届くように。しかしどこにも届かないのを知っている。

そしてその叫びは、全ての引き金となり 戦場に、深く深く木霊した。

悲しい、痛みを伴って。

第三話 疾風は猛牛の如く大地を駆け抜け（後書き）

こんばんは、柿木いちこでございます。

第一話、第二話、第三話はいずれも短めに区切ってお送り致しますが、

『わざわざクリックし直すのは面倒だからもう少し長めにやれ』という思いを持っていらっしゃる方や、『さつさとストーリー進めやがれ』という思いを持っていらっしゃる方。

どうぞ遠慮なく言ってやって下さい。私めも大変喜びますんで。

では。

第四話 蛮勇は時に未知数の結末を生み出し

最初に動いたのはクロナだった。

超長距離の狙撃すら可能にする可変倍率スコープと火薬の倍増によつて単純に威力の底上げを狙つてある《メテオバスター》。

はたまたロングバレルを取り付け集弾能力、威力の上昇、弾速の比較的上向を主に置いた《鬼ヶ島》。

その二丁から吐き出された死の銃弾が、遙か前方を我が物顔で飛翔していた《イャンガルガ》に向かつたのだ。

鉛を銅95%亜鉛5%からなるギルディング・メタルで包んだ被覆甲弾《パーシャルジャケット弾》は、大気という不可視の壁を突き破り、死神の姿を追い求める。

だが《イャンガルガ》は本能的に危険を察知したのか大きく旋回。直線的にしか進めない二発の弾丸を難なくかわした。

「ちつ……ダメだ、遠すぎる。この距離じゃ風に負けるし、しかも野郎はすばしっこいからな」

クロナが苦々しい顔をして呟き、二丁のボウガンをしまう。

その苦渋の表情からは、先程の決死の覚悟を秘めた形相を感じさせた。

恐らくはだが、彼なりにあの女の子の救助方法を考えているのだろつ。

確かに最重要、最も考えねばならない事柄だが、何よりもヤツを

沈黙させない限りお話にならない。

しかし長々距離の戦闘になってしまつと俺の突撃槍の出番はない。頼れるのはクロナのボウガンだけなのだが、それも厳しいようだ。

「あの娘さんさえどうにかすりゃあやりようはあるぜ、キース！どうにか助ける手段は？！」

クロナの問いに、一瞬だけ逡巡する。だが、助ける手段は最初からひとつしかなかった。そしてその手段には、ボウガンと突撃槍の連携が必要不可欠だ。

……もしやこういう状況を見越して、鍛冶屋のオヤジは《工房試作品ガンランス》を俺に渡したのだろうか？

それなら有り難い限りだ。そう思いながら傍らの突撃槍の封を解除、《火竜の骨髄》から構成される穂先を高速展開。

乾いた音がはじけ、炎が上がるのを見届ける事なく視線をクロナに移動、風の音を逆に掻き消すように声を出す。

「……なくはない、けど、それも近付かないと無理です！という訳で速度上げます、デッドウェイトになりそうなモノを捨てて下さい！！」

「よっしゃー！」

俺が叫んでから正確に二秒後、クロナはデッドウェイト排除作業に乗り出し、最も大きなモノを排除、というか鉄拳で粉砕した。そ

れは、四方を覆い尽くしていた黒い壁だった。というか車体《ボデ
イ》だった。

何か言おうと口を動かそうとするが、余りの早業に全く口を挟む
余地がない。ようやく静かになった時には、床板と二人分の椅子を
残すのみという極めて残酷な状態になっていた。

「まあいいです！しっかり捕まっけて下さい！」

ブルファンゴの尻に強烈な蹴りを見舞い、更に緊急停車用車輪制
動機を突撃槍でひっぺがす。

クロナが鞭すらも排除、または前衛的な破壊をしてしまったので
仕方なく蹴りを入れたのだが、どうやらそれは正解だったらしい。

直後、ブルファンゴの逆三角形の瞳が真紅に染まり、砲弾が発射
される轟音が響き渡る。轍は爆裂の傷跡のようになり、風景など見
えやしない。

「はや……すぎ……！！」

「……で、これからどうやってあの娘さんを助けるんだ？！」

余りの豪速に呼吸が制限され、喋り方が変になるが、とりあえず
は気にしない事にする。

「……まず、アナタのボウガンで……《イヤンガルルガ》の尻尾を

狙って下さおわあッ!!」

突如飛来してきた拳大の石が腰に激突。ハード・ケースに無惨な穴が開いた。

俺はそれを見て若干暗澹とした気分になりながら、穴から覗く“プラスチック強化構造式鋼糸”付き投げナイフを凝視する。

八本破壊され、残りは二本しか残っていない投げナイフを。

「だがよ……こんな状況下で、うまくヤレるかはわからんぜ?! ひよっとしたら、狩人伝言板でお尋ね者に祭り上げられるかもよ?!」

狩人伝言板でお尋ね者。まあ有り得ないだろうが、素晴らしくイヤだ。

全力で断固拒否したい。

「大丈夫です、信頼してますし、仮に祭り上げられたとしても『まさか彼がこんな事するなんて……』という友情を感じる言葉を送ります!!」

「はっは!!……よし、いい具合にノツてきたな、わかった、やってやるよ!!」

クロナがクールなウィंकを向けてきた。何しても絵になる人ってちょっと羨ましいと思いつながら、俺の考案した、名付けて『走っ

て飛んで救助活動大作戦』を説明する。

要するに、近付いて、女の子をどうにかして助け出して、というアバウトな作戦だ。

とりあえずは『イヤンガルガ』に接近しなければいけないが、これから先平坦かつ直線の道がかなりの距離続くので、そこは問題ない。速度的な関係もそうだ。

あちらの飛行速度を十とするならば、こちらは十五だからだ。流石は『ブルファンゴ』である。こんな時でなければ熱い抱擁をして差し上げたい。

次に女の子を助ける手段だが、これは俺に全て任せてもらう事にした。勿論、内容は秘密。

言えば、絶対に罵倒されるからだ。

「……いや、言えよ！」

「そんな細かい事はどうでもいいんです！」

冷静なツツコミを敢えて無視、既に発火作業を終え膨大な熱量を放っている突撃槍^{ランス}、『工房試作品ガンランス』の撃鉄を起こしておく。

クロナはまあいいかと言った感じで『メテオキャノン』、『鬼ヶ島』を紫の死神に向かって構え、切れ長の瞳を沈みかけた夕日に向けている。

その間も《ブルファンゴ》の豪速は全く衰えない。追走する二匹の猛牛はもはや走る事が宿命とばかりに走りまくり、もう《イャンガルルガ》の飛翔速度など遙かに超えていた。

「キース、こっちはいつでもイケるぞ！タイミングはお前に合わせるから、いつでも来い！！」

俺は頷き、前方の死神 銃弾の射程圏に入った《イャンガルルガ》を見据える。

猛然と突き進み一陣の豪風となった車両が《イャンガルルガ》を射程範囲内に捉えた瞬間、ヤツが首のみを動かしその緋色の瞳をこちらに向けた。

既に作戦範囲内に入っている。俺は覚悟を決め

思い切り、叫んだ。

「 今だ！！」

一刹那置き、殺意を秘めた双子のボウガンが眩いばかりの火を噴いた。銃弾に込められた火薬が暴虐の限りを尽くし、鋼鉄の殺意を更に加速させる。

ブラスト・エクスプローダー
爆裂装甲軟弾。

レンズ状に窪んだ形状をし、運動エネルギーを衝撃に転換する事で飛躍的に殺傷力を高めたホローポイント弾の窪みに、液体火薬や

粉末火薬、雷管を限界まで混入及び付着させる事により、更に威力を向上させた弾丸だ。

「サン……」

弾丸は空間を切り取るように一直線に爆進。

瞬間的に迫り来る、しかも完全に射程圏内にあった脅威を避ける事など出来るハズがなく、必死の抵抗むなく命中。

鋼鉄の弾丸は巨大な棘を持つ尻尾に喰らい付き、穴を穿ち、桃色の肉をさらけ出させ、赤々とした血を噴き出させた。

突如襲い来た激痛に、《イヤンガルルガ》の瞳に何らかの感情が宿る。

しかしまだ、こちらの攻撃は終わってはいない。

「ニイ……」

俺の呟きに一コマ程遅れて、爆裂、炸裂、破裂の三重奏が渦を巻き、尻尾の堅い甲殻や柔軟な筋肉、骨髓などを情け容赦なく抉っていく。

爆裂装甲軟弾の真の破壊力が、顕現化していた。

「イチ……！！」

絶叫。《イヤンガルルガ》は苦痛に身を振りながら絶叫していた。

しかしシャツは絶叫しながらも千切れかけた尻尾を振るい、体ごとこちらに向け、灼熱の業火を吐くべく首を仰け反らせた。

それこそが、俺の狙いだというのに。

「うおおおッらあああああッ！！」

腰のハード・ケースから《プラスチック強化構造式鋼糸》付き投げナイフを引き抜きざまに超速展開、車体のあちこちに鋼糸を巻き付けナイフを深々と突き立て、そのまま飛翔。

《ブルファンゴ》の頭を蹴り飛ばして更に飛翔速度、高度を上げ、《イャンガルガ》の懷に飛び込む。

「だあああああああ！！」

裂帛の気合いを込め、《工房試作品ガンランス》の燃え盛る穂先を木の幹のような脚に突き立てる。途端に肉と骨と血の焦げる臭いが漂い、次に《イャンガルガ》の絶叫が続いた。

追い討ちを掛けるように突撃槍の穂先を更に深くねじ込む。再度の爆炎は、肉が爆ぜ、血が蒸発し、白い骨を露出させる程の威力だった。

俺は絶叫が途切れるよりも先に女の子を拘束している指を引き剥がしにかかった。だが、右手は突撃槍を持たねば自由落下して挽き肉になるというイヤ過ぎる運命が待っているので、左手のみでやらねばならない。

しかも竜巻のように渦を巻く風圧に耐えながら、だ。

「くっ……」

……硬い上に空飛びそう。これはムリ

「……バカ野郎が！キース、行くぞ！！」

「はい？ 何を」

俺の当然かつ正当な疑問に対して返ってきたのは、一片たりとも
思いやりが見られない弾丸だった。

アンチアーマード・ピアシング・ブレット
対装甲高速徹甲弾。

タングステン合金やドラグライト鉍石、鋼鉄などの硬質で比重が
重い材料によって構成される銃弾で、運動エネルギーによりいかな
る装甲も撃ち抜く を謳い文句にしている。

その謳い文句に誤りなど存在するハズもなく、凶弾は硬い甲殻で
覆われた脚を易々と貫いていた。

ぽっかりと開いた穴から鮮血が溢れ出し、凍り付いていた俺の時
間が動き出す。

すかさず、当然のように緩まっていた拘束から女の子を引きずり
出し、脈拍やら呼吸やらを確かめる。結論。気絶しているだけ。

俺は安堵の息をつきながら、左手で女の子を抱え、右手で《工房試作品ガンランス》を握るといふ離れ業を敢行。

そしてそのまま右手と両脚に力を込め　突撃槍を引き抜きヤツの脚を蹴り飛ばし、虚空へと飛んだ。

轟々と唸る風が頬を叩く。全身が吹き飛ばされそうな感覚。

クロナが何かを叫んでいたが、風音と耳鳴りで何も聞こえなかった。しかし、言いたい事はよくわかる。

「文句なら後で聞いてあげますよッ!!」

突撃槍、《工房試作品ガンランス》の真価が発揮される場面。今しかない！

俺は内心で祈りながら、長大な刃　穂先の上に装着されている鉄筒を《イャンガルガ》の腹部に向ける。そして重い引き金を力尽くで絞り　鼓膜をブチ抜くような大音声が鳴り響き、《工房試作品ガンランス》が吼えた。

突撃槍の砲口から放たれた煉獄の導き手がヤツの腹部へと突撃。そして弾頭が腹部に食い込んだ途端　爆発的な業火が銃弾から溢れ、腹部どころか内臓をも灼いた。

《イャンガルガ》は狂ったように翼を振るい、悲痛な叫びを上げている。だが、煉獄は消えない。ナパームのようなものだからだ。その内に紅蓮の瀑布は全身に行き渡り、遂に《イャンガルガ》の体勢をを崩す事に成功。ヤツはそれから持ち直す事が出来ず固い地面に落下、何度も跳ねるようにして俺から遠ざかっていった。

フレア・フレア・フレア
発火滑腔砲。

初速を極限まで高め、弾芯を火竜の骨髓の最高部位のみで作り上げ、更に弾頭にも火竜の骨髓を溶かし込んで発火能力を持たせた砲弾。

これは鍛冶屋のオヤジオリジナルの砲弾で、コストパフォーマンスが悪すぎた為に結局生産されなかったモノである。

まあ、生産されなかった理由はそれ以外にもある。それは

反動が、大きすぎる事。

「ッ……！！」

発火滑腔砲を撃った衝撃で数メートル宙を吹き飛ばされる。俺はすかさず“プラスチック強化構造式鋼系”を引き寄せ床板のみの馬車に着地。

さあ、問題。果たして、床板一枚に人間二人　しかもかなりの速度で落下している　を支えるだけの強度があるだろうか？

答え。ある訳ねえ。

当然の如く材木を突き破り、しこたま全身を打ち付けるだけです。しかし、ちゃんと女の子を抱いておく事だけは忘れない。まあそこら辺が紳士の証明だ。多分。

それにしても　と、視線を向ける。

美しいウェーブが掛かった琥珀色の髪。まだ幼い体を包む軽装鎧、《チェーンシリーズ》。まだ年端もいかないうような少女が、一体なぜ

「このボケタレ！」

「がはッ?!」

思考を遮る二発の打撃を後頭部に喰らい、膝が崩れ落ちる。凄まじい破壊力だ。流石はハンターだという所だろうか。その時偶然女の子を押し倒したような格好になるが、俺のせいじゃない事を声高に主張したい。

「んな事やるなら先に言っとけってえ……のッ!」

クロナが《ブルファンゴ》の手綱を力一杯引つ張り、走行を止めようとする。

先程俺が頭を蹴り飛ばし一頭の走行速度を強制的に落とさせた事から速度は随分下がっているが、いやそれでも速い。

二頭の《ブルファンゴ》は荒々しく蹄を地面に突き立て、激しい振動を伴いつつも、緊急停止を敢行。

土煙が辺りを覆い、車輪が軋み歪み鳴く。次第に速度は緩まっていき、最後には停止。

ようやく生命の安全圏に入った事に嘆息しながら少女を《ブルファンゴ》の背中に乗せる。《ブルファンゴ》は若干迷惑そうな顔をしたが、すぐに通常の顔に戻った。そして俺は思い出したように口を開く。

「……徹甲弾はさ、危ないと思いますよ、俺。あと数センチずれて

たら確実に肥料でしたよ、俺」

実際危なかった。俺がクロナの声に反応し振り返らなかったら、絶対に自然淘汰に組み込まれていただろう。

一言文句という形式で礼を言おうとクロナを振り向いて、固まる。

クロナは横を向いていた。その視線の先には、血にまみれた《イヤンガルルガ》がいた。翼はへし折れ、脚は白骨が覗き、腹部からは巨大な内臓がはみ出ている。勿論、炎もまだ消えちゃあいない。

俺はその姿を見て、恐怖という大蛇が背中をせり上がってくるのを感じていた。ヤツはあれだけの損傷 致命的ともいえるダメージを被っているというのに。

瞳の真紅は、更に色濃く力を増していたのだから。

「……」

何も言わず、クロナが歩き出す。七歩進んだ時、クロナは《イヤンガルルガ》と対峙する形となっていた。

「クロナ！」

一人と一匹の間で、射殺するような視線が交差する。見えない重圧。濃厚な殺気。

俺は完全にその重圧に負け、身動きが出来ない程に萎縮する。

やはり、互いに睨み合ったまま、一寸たりとも動かない。

そう思った次の瞬間、人と飛竜は同時に地面を吹き飛ばし、互いの間合いへと躍り出て行った。

第四話 蛮勇は時に未知数の結末を生み出し（後書き）

こんばんは、柿木いちこです。

この作品ですが、第一話から第六話まではある意味プロローグで、第七話から本格的にストーリーが進む……予定です。

では。

第五話 終りは時に呆気なく迫り

粉塵が舞う。土煙が命を吹き込まれたように躍る。土塊が破碎される。

そうした破壊活動の末、クロナと飛竜が不吉の象徴の如く飛翔。竜巻の速さで一匹と一人が交差し、そしてその不可視の一瞬で血しぶきを撒き散らした。

クロナと《イャンガルガ》は同時に体勢を崩し、苦痛に顔を歪める。

俺には何が起きたかわからない程の神速だったが、彼にはいや、彼らには当然の事らしい。

クロナは直ぐに体勢を立て直し、血に染まった体を気にする素振りすら見せずに、宙にいる状態で発砲した。しかしそれを読んでいたかのように《イャンガルガ》は首を下げる。

一直線に突き進んでいた弾丸はそのまま空間を箭断、ヤツの頭上を抜けて行った。

「チッ！」

クロナが乱暴に着地し、舌打ちをする。着地の衝撃で足元の地面は見事に陥没。

ヤツはクロナに少し遅れて着地、そのまま首だけを巡らせ火炎を

放つ。触れれば一瞬で溶解される灼熱の火炎を。

しかし双銃の偉丈夫は全く動じず、自然な動きで体を横に逃がし、豪火球を易々と回避した。

「はあっ！！」

裂帛の大音声と共にボウガンを超速連射、鋼鉄の殺意が爆進する。雨あられと降る死の弾丸。回避方法など皆無に思える。

だがヤツは大きく息を吸い業火を吐きちぎれかけた尻尾を犠牲にし、銃弾を撃ち落とし、尻尾で弾いた。

「……………」

申し合わせたかのように後退、再び飛竜と人間が対峙する。双方ともに満身創痍だが、瞳だけが爛々と輝いていた。

漆黒の瞳は全てを呑み込むように。

紅蓮の瞳は全てを灰塵と化すように。

「……………おい」

不意にクロナが口を開いた。

「もう、終わりたいんじゃないのか、お前……？　なんか、そんな気がするんだが……」

クロナの問いに、飛竜は体を揺らす。だが、それだけ。飛竜は答えない。不可解な問いに戸惑っているのかもしれないが、しかし飛竜に人間の言葉が解るハズもない。

クロナはそれを見て逡巡するように、何かの時間を稼ぐように、ゆっくりと瞳を閉じる。《イャンガルガ》は一瞬だけ戸惑ったように瞬き、しかしすぐに脚を地面に突き立てるようにして、自身の巨大な体軀を感じさせない疾駆を開始する。距離はあるものの、ヤツの反り返った大爪がクロナを引き裂くのは、恐らく数秒も掛からないだろう。

だが

「悪いな、楽には死ねないかもしれん」

全く動じていない　清澄の水面の如き声が、玲瓏と響く。何時の間にか瞳を開いていたクロナが、静かに言葉を紡いでいた。瞳には、深い憐憫と後悔の感情が吹き荒れている。

しかし、もう逡巡するような素振りはない。彼は決断したように、構えていた《メテオバスター》の弾装を排出。澄んだ金属音が鳴り響き、鋼鉄の弾丸が地に落ちる。

彼はそれを見届ける事なく掌で弄んでいた一発の弾丸を取り出し

一挙手一投足にまるで無駄のない動作で装填。

しかし、彼が銃弾を放つよりも《イャンガルガ》の爪の飛来速度の方が速い。だが彼は逃げなかった。

風切り音の後、甲高い金属音。鎧が紙切れのように引きちぎられ、散乱する。

鎧の下に着込んでいたキチン合金のボディーアーマーまでが絶叫を上げ、粉碎。躍るように血の珠が跳ね、少し遅れて真紅の川が、壊れた鎧の上を伝う。

流石のクロナもこれには耐えかねたのか、強靱な犬歯を噛み砕かんなばかりに食いしばっている。食いしばった唇からは、大量の鮮血が溢れた。

「ゲハッ……はぁ、はは……よし、来たな……ッ！」

そう呟いたクロナは、凄絶な笑顔を浮かべる。血に濡れた口唇が不吉さの顕現化とばかりに輝き、出血の為か青くなった顔をより一層不気味に際立たせていた。

クロナは唇を歪めたままボウガンを《イャンガルガ》の額に突き付ける。撃鉄は既に起こされている。回転式弾装に込められた未知の銃弾は、指をほんの少し動かすだけで召喚されるのだ。

ヤツはそれを悟ったのか、鼓膜をブチ破る甲高い雄叫びを上げ、クロナに突き刺さったままの血に濡れた脚を引き抜こうとする。

……だが、抜けない。しかしそれは当然だろう。彼は、ボウガンを持っていない左腕で、大振りのナイフを巨大な爪に喰らいつかせているのだから。

焦った《イヤンガルガ》の燃えるような瞳と、不敵に笑うクロナの闇色の、全てを呑み込む瞳が出逢う。

交差する漆黒と真紅。

クロナはそのまま瞳を逸らさず、絶対の力を持つ飛竜と真っ向から対峙し

「……あばよ」

引き金を引く冷たく、乾いた音と、銃身が爆裂した音が重なる。バラバラになった銃身から放たれた弾丸は、信じがたいモノだった。

ブラック・クロス
黒十字弾。

ドラグライト純鉾石や様々な細菌から成る弾頭に十字の切れ込みを入れ、目標内部で十字に沿って四つに分裂し、貫通するようにした殺傷力の高い銃弾。

黒十字軍　かつての黒龍伝説を打ち立てた軍隊の象徴印を模した弾丸である。勿論その威力は通常弾頭などとは比べモノにならない。そしてその一方的な、莫大な破壊力が無慈悲に顕現化する。

光と見間違う程のノズルフラッシュ。自身の銃身を代償とした力は、この光と共に現れ、そして光の消えやらぬ内に消える。つまり、視認出来ない速さがこの弾丸の特性。

零距离。動く事すら許されず、鈍色の閃光は紅の甲殻を問答無用で撃ち貫き、そして血の雨を降らせる。

眼球、前葉頭、脳漿、脳髄を貫かれ、崩れ墜ちる《イャンガルルガ》。粉塵が赤々とした甲殻と紫色をした甲殻を包み、覆い隠す。クロナの姿も若干ばやけたように映るが、視認は出来た。

しかし次の瞬間、砂塵の城壁に隠されていたクロナの体躯が何の予備動作も見せずに、地に倒れ伏す。冗談のように溢れ出た血液が土を、鎧を、全てを汚していく。俺は慌てて穂先が溶解している突撃槍を手に、彼の元へと走り出す。

この時、地に倒れ伏している《イャンガルルガ》の傍を通り過ぎた。ヤツは、この飛竜は、これ以上ないくらい完全に死んでいた。ぽっかりと空いた穴からは毒々しい色をした脳漿。真紅の瞳は既に何も映していない。

呆気ない。呆気なさすぎる最後だった。

だが、だからといって悲しくも思わないし、同情もしない。ただ呆気ないと思うだけ。目を向けると、赤々とした夕日はとつくの昔に沈んでいた。

「クロナ、ちょっと、しっかりして下さいっ！」

俺の呼び掛けに、虚ろな瞳を向けてきたクロナ。彼は弱っている

のを見せまいとするように、気丈にも苦笑して見せた。

「無理……黙っていたが俺は酷くナイーブなんだ。蠅も殺せない」

「……それだけ言えるなら大丈夫です。ちなみにナイーブなんて言葉を書きたいなら、俺のような見るからに不幸そうな男にならなきゃダメですよ」

わざとふざけて返すクロナに、俺も同調して返す。

しかし言うまでもなく彼の損傷は甚大だ。腹部に空いた空虚は確実に内臓を傷付けていると推測出来る。彼を助けたいのならば、急いで村に舞い戻り、そして唯一の緊急手術施行が可能な診療所に行かなければ。

俺が持っている回復薬では応急処置すら満足に出来ない。

「クロナ、今から急いで村に戻りますよ。ああ、動かないで！すぐに《ブルファンゴ》を連れてきますから！……動くなっつってんだろオが！！」

なおも動こうとする馬鹿、或いは阿呆にそう言い残し、これ以上ないくらいの確かつ迅速に《ブルファンゴ》を配置。彼を慎重に《ブルファンゴ》の背中に乗せ、仕方なく女の子を俺が背負う。

回復薬　気休め程度だが無いよりマシだろう　を塗り、最高

速度でもと来た道を引き返す。こういう怪我は如何に素早く適切な処置が出来るかが鍵になる。ブルファンゴがいたのは幸いだった。

「……………全く」

俺は最高速の超絶な風圧を目一杯に受けながら、クロナの様子を見ながら、思った。

あの飛竜とはどんな因縁、確執があつたのだろう　と。

ま、思うだけだ。

ヤツとどんな確執があるうと、それによってどんな感情が生じていようとクロナはクロナだし、俺には関係ないしね。

とその時、後ろの女の子が寝苦しそうに体をもぞもぞと動かし、俺はこの状況をどう説明したものかと柄にもなく焦ったが、結局起きなかった。

驚かすなよ、と言いたくなつたものの、今はそれ所ではないので放置。しかし思考は止めない。何せ飛竜に誘拐された、若干ハンタ―風味の女の子なのだから。

確かに女のハンターは山程いるが、こんなに小さな女の子は見た事がない。年は……俺より三つ程下だろうか？

などという事を、俺はなおも加速する《ブルファンゴ》に跨った状態で思っていた。この満点の星が輝く満点の夜空の下で。

そして俺は、もうひとつの思考を無理やり押し隠しそうとしていた。明らかに厄介事に巻き込まれるのが解っていたからだ。いくら

俺が人々を守る為にハンターを始めたといっても、遠慮したかった。

余りの殺傷力の為に数年前に製造、販売、所持が禁止された禁断の銃弾を、クロナはどうやって手にしたのか。

そして 少女は何故殺されず、何故連れ去られたのだろうか。
ヤツは明らかに、少女を ……。

そう。

出来る事ならば、考えたくはなかった。

第五話 終りは時に呆気なく迫り（後書き）

こんばんは、柿木いいちでございます。

少し間が空いてしまいましたが、もう少しで新章をお送り出来ます、ハイ。

しかし……恐ろしく早足です、第一話から第五話。

新章はもっとゆったりのんびり、あと文章量も上げようかと思っております。

それに比例して技術の向上が出来れば良いんですがね……

では。

序章 最終話 無知は己の未来を切り捨て

「一から説明しよう」

朝陽が開け放たれていた窓から入り込み、宙に舞う埃が明確に映し出されている、いつも通りの朝。

俺は様々な装備品や道具を詰め込んでいる道具箱に背を預け、純白のシャツが敷かれただけの質素な寝台に体を向ける。

寝台の上に巡らせた視線の先には輝かしい琥珀の残滓。淡い琥珀の、若干緩やかな曲線を描く長髪。大きくかつ丸い、人形に埋め込まれている硝子玉のような澄んだ色彩を灯している双眸。張りのある薄い桃色の唇。少女特有の穏やかな顔立ち。

だが、今の彼女を形容するのに『穏やかな』というのはかけ離れているだろう。形の良い眉はこの上なくひそめられているし、眉間にはシワが寄っている。

それにだ。俺が握っている手鏡に映る俺の顔を見ればわかるが、彼女は起きるなり俺を引つかいた。若干悲観的になりつつ鏡に視線を落とすと、漆黒の短髪が淡い影を刻んでいる額に三本赤い線が走っており、見ようによれば端正な鼻梁にも絶望的な傷跡が残っている。

これが命の恩人に対する態度かよ？　と思わないでもないが、ま

あ朝起きたら知らない家の寝台の上で鎧脱がされてて、更に寝台の隣に、椅子に座りながらにこやかに微笑むこれまた見知らぬ男がいたら……うん、気持ちわかる。

「君は正体不明の飛竜に輸送馬車の如く輸送されていたんですが、そこは覚えてますか？」

しれつとした表情で尋ねる。が、本当は顔中が痛くてたまらねえ。

ちなみに、《イャンガルガ》を正体不明の飛竜と呼んだのはいらぬ秘密に彼女のような子供を巻き込ませない為である。

俺にあの死神を教える際にクロムはああ言っていたが、恐らくは軍事機密以上の秘密の筈だ。

何故なら、国家防衛で様々な機密に触れていた父からすら、そんな話を聞いた事がないからね。

とそんな思考を纏めていると、彼女が驚いたような表情で俺の顔を見ている事に気付いた。もしかして、傷付けたのはマズかったかなーなんて思ってたさっさと下さってくれてるんですか？

「私が……飛竜に……？ ……嘘言わないで下さいよ、第一飛竜が人間を生かして連れて行くとも思ってるんですかっ?!」

うわあい違った、しかも素晴らしく憤慨していらっしやる。

だが彼女の言い方ももっともだ。普通ならば、飛竜が人間を殺さずに連れて行く理由がない。

そう、普通なら、ね。

「俺も思っ てないけど…… まあそこは置いておきましょう。多分どこまで行っても平行線でしょうからね。だって俺ですら飛竜が君を殺さなかった事が理解出来ないんですから」

そう、理解など出来ない。そして理解出来ない事こそが、彼女を家に連れて帰ってきた理由でもある。

「……私を、助けた　と？」

「ん？　まあそうなりますかね。一応、頑張ったりなんかしちゃいました」

「……何故、私を助けたんですか？　あなたはさっき、正体不明の飛竜だと言ったでしょう？　未知の化け物と闘うなんて、ハンターとしての流儀に背くじゃないですか？　死ぬかもしれないのに、どうして？」

少女の散弾のように大量の疑問を投げかけられ、俺の動きが止まる。

ここで『依頼通りヤツを殺そうとしたら、君がいたのに気付いてやむなく助けた』と正直に言っても良いのだが

俺は苦渋に顔を歪ませつつ、顔中の傷跡を鏡を掴んでいない右手で触る。まだ痛い。

という訳だから、少しばかり、ほんのちよつとだけからかってや

ろっ。

「そうですねえ、何故助けたのか？ と君はお聞きになった訳ですが、逆に問いましょ。助けないなんて選択があつたと思いますか？」

「え？」

「私はね、自慢じゃないですが一目惚れというヤツをした事がないんですよ」

椅子から速やかに立ち上がり、寝台に腰掛ける彼女の隣に腰を下ろす。

途端に彼女が警戒するような瞳を向けてくるが、とりあえず無視して続ける。

「ここで更に質問ですが、君は好きな男性が死にそうなのを黙って見ている事が出来ますか？」

「……？ ……っ！」

最初に疑問符を浮かべた少女はしかし、次の瞬間に俺の言いたい事に気付いたのか、顔を真っ赤にして俯いた。うんうん、年頃だねえ。初々しくて素晴らしいっ！

俺は最上級の微笑みを浮かべながら、彼女の琥珀の髪を優しく梳いてやりながら更に言葉を紡ぐ。

「そういう事です……察しの良さそうな君ならお気付きでしょうが……そう、俺は君の事が好」

「ニヤア　っ?!」

「ぐおおっ?!」

突如鼓膜を爆裂させんばかりの絶叫が俺の後ろから放出され、驚いて背後を振り向くとそこには、赤い体毛に全身を覆い尽くされ、同じく赤いマフラーを風もないのにはためかせている、どこか間の抜けたアイルーがいた。

「れっ、レッド?　一体どうしたんだ?　言っておくが、マタタ
」

「ごっ、ご主人様が若い女子連れ込んでやがるニヤアっ!　は、背後に陰謀のかほりがするニヤ　……!」

と言って勝手に恐れおののき始める短絡的馬鹿アイルーをしばき倒して、多少熱くなった頬を誤魔化すように叫ぶ。

「お前は馬鹿かっ?!　ていうか、お前ご主人様をもっと敬った拳げ句に信用しろよ!　なんだよ背後関係って?!」

「いだいニヤア……だがご主人様、悪事はいけないと」

「だからっ、悪事なんてこれっぽっちも働いてないって言うてんだろぅがあっ！ 前から思ってたけど、お前の頭は弾丸よりも悪いな！ ああ君にはわかりづらいかもしれんが、要するに無機物よりも馬鹿って事だよこの限界突破低脳っ！！」

「ニヤアんだとこのヘタレご主人様がっ！ アンタの寝台の下にあるモノの方がよっぽど低脳の証じゃニヤいかっ？！」

「う、うぐ！ お前、俺の空薬夾コレクションを勝手に見たのかっ！ 確かにみんなおかしいって言うけどさっ！」

不毛な言い争いだ、俺たちにとっては全力の闘いである。まさにスケールの小さな戦争ってヤツだ。

俺が更に舌戦を展開しようとする、隣から小さな笑声が漏れている事に気付いた。

レッドと同時に隣を見ると、そこには俺たちの戦争を聞いて忍び笑いを必死にこらえていた少女の姿。

俺はなんかもうやる気が失せて、でもどこか嬉しくなったので、かなりクサイ言葉を言う。

「やっと笑いましたね。俺の読み通り」

この言い方ではまるで君を笑わせる為にこんな下らない事をやっ

たんだよーと言わんばかりの下らない自尊心が見え隠れしているが、まあいいよ、うん。

「……」

彼女は恥ずかしそうに俯く。その姿からは、警戒とかそういう感情を感じとる事が出来なかった。

俺は今は好機とばかりに口を開く。

「俺は、キース・ヴァンドレ・ハーツと言います。 君の名前は？」

俺の言葉に彼女は俯いていた顔を上げ、そして口を開こうとして表情が一変、悲しげに歪んだ。

俺が一体どうしたんだと言おうとすると、彼女が首を振りながら言葉を紡ぐ。先ほどの表情からは全く信じられないほどの焦燥と動揺が、今の彼女には現れていた。

「わ、から……わからない……なんで、なんで……？」

頭を抱え、何度も何度も首を降る彼女の姿は、かなりヤバそうだった。一抹の不安を胸に秘めつつ、尋ねてみる事にする。

「……わからないって、名前がですか？」

「……」

彼女は答えなかったが、その沈黙こそが無言の肯定である事を如実に語っていた。

俺は昔医者に聞いた話を思い出しながら、推論を構築。

「……もしかしたら君が飛竜と戦った際に、脳　つまり海綿体に何らかの障害が起こったのかもしれないな。一時的な記憶障害の可能性が高いから、後でヘンリーに見て貰えばいい。大丈夫、彼女は天才ですよ。性格を除けばね」

と言ってから、コレ全く慰めになってないなと思いつつ、泣きそうな少女をどう泣き止ませるかも考えて途方に暮れそうになる。

冗談抜きで言うと、俺は恋愛手前まではかるうじていくものの、いつもいつも恋愛まで至った事がないから、女心などがまるでわからないのだ。

何故いつも恋愛手前で止まるかというと、そこはまあ割愛させて貰おう。思い出すと腹が立つからね。

とりあえず解決策を探るべく視線を巡らせていた俺は、ふと部屋の端、狩人伝言書の束の一面記事に目が止まる。そこには『セリアルド・クセフ』という幻の都の特集記事があった。

全くの事実無根、ただの妄想を連ねただけの記事で、俺は流し読みしてそのまま放置していたのだが、それを見て俺はある事を思い

付いた！

しかし素晴らしくその場しのぎな解決策なのも事実なので、内心ビビりながら提案してみる。

「えーと、じゃあ思い出すまでの繋ぎという事で、セリアと名乗っておくという提案は、いかがなものでしょうか？」

うわ、苦しいな俺。ここまで追い詰められたのは、ソロで砂漠地帯横断した時ぐらいだよ。

仕方なく優しげに微笑んでみると、彼女は呆気にとられたような顔で俺の顔を凝視していた。まあ気持ちはわからんでもない。

少し陰鬱な感情に浸っていると、この上なく馬鹿丸出しな馬鹿発言が飛び出してきた。

「……ご主人様、まさか記憶喪失の女子を狙って誘拐してきたとか」

「思い付きで、脊髓反射で言葉を口にするな、頼むから。ていうかブルーはまだか？！ アイツが一番女心わかるだろう？！ なんか前『私は恋愛経験だけは豊富ですよ』とか言ってたし！」

「ああ、アレ嘘ですニヤア」

「即答？！ なんだよそれ、俺結構信じてたんだぞっ？！」

聞き分けのない子供のように俺が暴れ出すと、道具箱に立てかけていた半潰の豪槍が、音を立てて床板に倒れ込んだ。

半端のない熱量を撃ち出したせいで融けた穂先が俺の方を向き、内心狼狽。巨大な亀裂が走っている砲身を見て、弾丸は出ないだろうと安心。

しかし倒れたままというのも気になるので、不毛な口論を一時中断し、寝台から立ち上がって歩み寄って、突撃槍の柄を掴む。

ついでに砲塔の展開を試したが、内部の展開用の機構が破損しているらしく、まるで動かない。

「……はあ、あのオッサンやたら怒るだろうな。まあいつか」

嘆息しながら道具箱の横に再び突撃槍の残骸を立てかけようとすると、白くなめらかな肌に覆われた指が、曲がった穂先を優しく撫でていた。

不思議な行動に俺が問い掛けの声を放とうとした瞬間、少女がゆっくりと言葉を紡ぐ。

「……さっきの話は、本当みたいですわね。こんな融解の仕方は、普通の飛竜に使う砲弾じゃ有り得ないし……」

少女が推測を語っていく中、俺は驚愕を隠せなかった。

まさか少し見ただけで融解の原因を理解してしまうとは思っていなかったのだ。普通あれほどの破壊の傷痕を見れば、飛竜にやられたモノだと推論するハズである。

俺は彼女も一人のハンターだと認識を改め、満足げに頷いてやる。

「そう、そうです、君の言う通りで、そもそも市場に流通している砲弾とは口径、いや内蔵物からして違う。

特殊な鉍石や火竜の骨髓、細胞、甲殻組織に皮膚組織なども組み込まれた特製の弾芯、弾頭から出来ていますから」

「……名前」

「……ってハイ？」

顔を覗き込んでみると、彼女は恥ずかしそうにそっぽを向いた。

「セリアで良い……です」

「……そっか」

苦笑し、呟きながら俺は思う。

恐らくだが、彼女はあそこまで壊れた突撃鎧を見て、俺たちがどれほどのリスクを支払ったかがわかったのだろう。

……もつとも、理解した振りをするという、彼女なりの処世術かもしれないが、俺は別に構わない。

何故って、ずっと不信の目を向けられるよりはずっとマシじゃないか？

俺はそうひとりごちながら、今回の最大の功労者である鎧に、心の中で感謝しておく。

鋼の穂先が、迷惑そうにうなだれた幻覚が見えた。

（それにしても……話がややこしくなってきたな）

顎に手を掛けながら、最初から今までのいきさつをざっと並べ、そこから様々な推測、憶測を立ててみる。

（まずはクロナ。最初の出会い、彼があのだタイミングで現れるというのは確実に何かを狙ってのはずだ。

しかし本当に彼がヤツを追っていたのなら、俺とヤツがやり合い獲物が殺される可能性を、黙って見ているハズがない。

つまり、彼の狙いは飛竜ではなく、この俺の可能性もある……）

確かに俺には恨まれる理由がある。個人的にも然り、俺の家名でも然り。

（次にこの少女。飛竜に殺されなかったのもそうだし、記憶障害という話も妙だ。話が上手すぎる。

だが、俺を騙そうとしているような感じは一切見られないのも事実。先ほどは彼女の欺瞞を疑ったが、それすら真実のように思えるくらいだ。）

わからない。何もわからない。結局は振り出しだ。

何が真実で何が虚構かすら理解出来ないのだから、その流れも必然なのだろうけど。

空は蒼く、俺の内心をよそに透き通った色を浮かべていた。
そしてそれこそが、これから始まる呪わしき未来を暗示している
ようにも見える。

そう、俺は何も知らなかった。

《イヤンガルガ》が死んだ時から、全ては火急的に進行してい
く事すら。

既に俺の未来は決定づけられていたのだという事も。

序章 最終話 無知は己の未来を切り捨て（後書き）

どうも、柿木いいちこです。

まず、1ヶ月も更新が滞っていた事にお詫び致します……。本当
にすいませんでした！

実は、私の文章の余りのアレな事と、薄っぺらなアレに絶望致し
まして、しばらく修行を行って参りました次第で。

今さら何言つてやがるんだと思われるかもしれませんが、これか
ら第一章、新章が始まりますので、よろしければ見てやって下さい。

ではでは、これからよろしく願います！

柿木いいちこでした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1418c/>

Monster Hunter ~ ある晴れた空、旅立ちの日 ~

2010年10月12日02時37分発行